

フィンランド人移民と北米大陸の鉱業

Finns and Mining in North America

原田 洋一郎¹⁾

Yoichiro Harada¹⁾

要旨： 本稿では、19世紀後半から20世紀初頭にかけてミシガン州北部の鉱業地域に流入したフィンランド人移民が、どのように地域に定着し、居住域を拡大していったかについて、ルーテル教会の聖職者であり、スオミ大学の歴史学講座の教授も務めたA・ホルミオの著作に記述された事例を資料として検討した。フィンランドからの移民は、フィンランド中部出身の者が多かったが、その中でも銅鉱業地域には北側、鉄鉱業地域には南側の地区からの移住者が多いという傾向が確認された。ハンコックのような都市的集落では、商店や専門的な技術を必要とする事業所などの経営や教育機関での就業を通じて地元で定着する者があった。鉱山の衰退期には、20世紀の初頭、さまざまな産業や生活で大きな需要があった材木の伐採の労働力として、域内の各地に転出する者が少なくなかった。また、伐採跡地や他の耕作適地を開墾して農場を経営する者もあった。

キーワード： フィンランド 移民 鉱業 北米大陸 ミシガン州

1. はじめに

ミシガン州北部のアップパー半島諸郡には、現在のフィンランドの領域を出身地とする人びとが多く居住している。この地域は、銅や鉄の鉱石を産出する地域として19世紀半ば以降、米国内外から多数の人々が集まって成立した地域でもあった。この時期のフィンランド人移民の多くも、鉱山での就労を目的として移住したとされている。

この地域に限らず、一般に、鉱業は激しい盛衰を伴い、比較的短期間に地域に大きな変化をもたらす。また、多種多様な住民が集住すること、活発な人口移動がみられることもその特質のひとつであり、鉱業に関連した地域の景観や文化には、しばしばそうした特質が刻印されている [1]。19世紀後半～20世紀初頭にかけてのアメリカ合衆国の鉱業地域においては、文字通り世界中から、それぞれにさまざまな文化を伴って人々が集まり、鉱山の衰退とともに他地域へ広がっていったことが知られている。アップパー半島の銅鉱業地域の形成について検討した筆者は、かつて同地を訪れた際に、市街地の各所にフィンランド国旗が多数はためているのを目にしたことがあり、この地域にフィンランド人が多く定住するようになった背景について関心を抱くようになった [2]。

本稿では、19世紀後半から20世紀初頭にかけてミシガン州北部の鉱業地域に流入したフィンランド人移民が、どのように地域に定着し、居住域を拡大していったかについて検討する。

その際の資料として、ルーテル教会の聖職者として合衆国を訪れ、スオミ大学（現フィンランディア大学）で歴史学講座の教授を務めたアルマス・K・E・ホルミオによって著された“History of the Finns in Michigan”に記された事例を用いることとする [3]。ホルミオによるこの業績は、対象とする時期や地域における数値の信頼性の欠如もあって、統計数値などの客観的な裏付けにはさほど重点が置かれぬ傾向があるが、旧スオミ大学の膨大なアーカイブ資料を駆使して、個別具体的な出来事が多数収録されており、本研究の目的にとっては好適な資料である。

なお、本稿における「フィンランド人」とは、現在のフィンランドを故地とした人々やフィン語を主な母語とした人々を指し、特定のエスニック集団を指すものではない。

2. フィンランド人移民の概要

1) 18世紀以前のフィンランド人移民

寒冷な気候に加えて国土の大部分が森林で占められたフィンランドでは伝統的に狩猟や森林資源を活用した生業が広く営まれてきた。そうした生業の多くは移動を伴うことが多かった。

ヴァーサ朝の初期、グスタフ・ヴァーサ（在位 1523～1560年）からその子息で5代目国王のカール9世（実質的な在位 1599～1611年）の時代には、スウェーデン領内陸部の広大な森林を開墾して租税を増徴するべく、フィンランド人の移住が奨励され、移住者が著しく増加し

1) 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科目

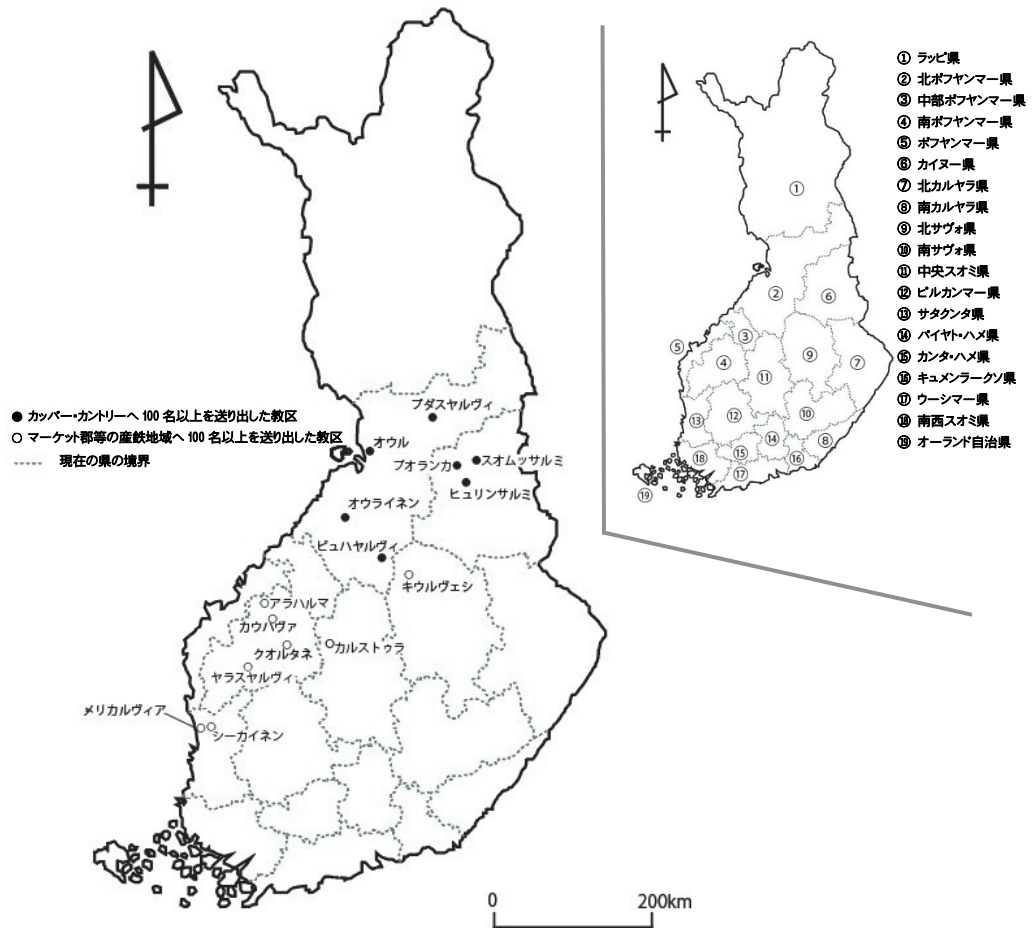


図1 ミシガン州アッパー半島の鉱業地域への移民の多いフィンランドの小教区
(A.Holmio. “History of the Finns in Michigan”, pp.444-450 を参照して作成)

た。とくに、焼畑農耕が盛んであったサヴォ地区（現北サヴォ県、南サヴォ県など）やハメ地区（現パイヤト・ハメ県、カンタ・ハメ県、中央スオミ県、キュメンラークソ県など）からスウェーデンへ流入した者が多かったという。スウェーデンがバルト海沿岸の強国として知られるようになった、グスタフ2世アドルフ（在位1611～1632年）、クリスティーナ（在位1632～1654年）の治世に銅と鉄が増産されるようになり、これらを主要な輸出品として対外交易が盛んに行われるようになった[4]。スウェーデンの海外進出の気運を背景として、北米デラウェア川下流域に植民地、ニュースウェーデンが建設されたのもこの頃のことであった[5]。

スウェーデンからこの植民地へ入植した者の中にフィンランド人も含まれていた。ホルミオは、前述したサヴォ地区やハメ地区からスウェーデンへ移住した焼畑耕作民が、今度は、樹木の継続的な伐採を必要とするという、その農法ゆえに立ち退きを余儀なくされ、そのうちの一部が植民地の入植の勧誘に応じた、と述べている。焼畑

農法が森林を破壊するのみでなく、スウェーデンの重要な輸出品であった銅、鉄の製練に用いる木炭の獲得と競合したということも、焼畑耕作民への冷遇の理由のひとつであった[6]。

フィンランド人は、スカンディナヴィア半島北部、現在のスウェーデンのノールボッテン地方やノルウェーへも移動した。ジョン・I・コレマイネンの調査によれば、これらの地域へのフィンランド人の移住は、大北方戦争（1700～21年）の時期に、ロシア人の暴虐を恐れようとした人々によって始まったものであるという[7]。1740年代以降、トルネ川を挟んだ西側へのフィンランド人の移住が始まった。多くの教区ではフィンランド人が多数派となり、スウェーデン北部の教区の聖職者はバイリンガルであることが求められるほどであった。

1826年には、コーフィヨルド（現ノルウェー、トロムス・オ・フィンマルク県）において、英国人が経営するアルタ鉱山によって銅の採掘が始められた。ここには、コーンウォール地方出身の英国人坑夫をはじめ、多くの

人々が集まった。1855年の人口統計によれば、コーフィヨルドの人口854人のうち、439人がフィンランド人、273人がノルウェー人であり、残りがスウェーデン人や英国人などであった[8]。19世紀の半ばを過ぎる頃には、この地の銅鉱業は衰退し、坑夫たちはここを退去して、米国のミシガン州やミネソタ州を目指したのであった。

2) アッパー半島へ移住したフィンランド人の故地

アッパー半島へ移住したフィンランド人のうちには、どのような地域の出身者が多かったのだろうか。ホルミオは、教会や禁酒協会の名簿などの資料を用いて、アッパー半島のクッパー・カントリー、すなわち、ホートン、キウイノー、バラガ、オントナゴン、およびマーケット、ディッキンソン、アイアン郡の産鉄地域に居住したフィンランド移民11,065人分の出生地を明らかにした[9]。図1は、その結果をもとに、100人以上の移民をそれらの地へ送り出した、フィンランド福音ルーテル教会の小教区を中心とする都市の位置を示したものである。ホルミオは、その調査で示された数値は、実際にフィンランドから移民した者のすべてを示すものではない、という注釈を添えているが、移民の出身地の傾向を把握することはできるであろう[10]。

図1からは、フィンランドからアメリカへの移民供給源としてはフィンランド中部が卓越していたことが明らかである。中でも、現在の南ポフヤンマー県や中部ポフヤンマー県といった地区から多くの移民があった。フィンランド中央部は、16世紀頃より盛んに海外へ輸出された木タール(乾溜液)の主産地であった。大北方戦争後、1721年にスウェーデンとロシアの間で結ばれたニスタット条約によって、交易の拠点であったヴィープリ(現ヴィボルグ)および東部のカルヤラ地域の一部がロシアへ割譲されると、フィンランド南東部の湖水地域におけるタール生産は衰退し、代わってポフヤンマー地区が主要な生産地となった。だが、19世紀になって、鉄製の蒸気船舶が航海の主役となると、タールの需要は激減した。ポフヤンマー地区は農業適地とはいえなかったため、この地区の人びとは、生計維持のためにフィンランド南部の都市の工場や鉄道建設現場などでの出稼ぎに赴かざるを得なくなったという。

また、図1によれば、北ポフヤンマー県、カイヌー県といった北寄りの地区では、クッパー・カントリーへの移民が多く、南ポフヤンマー県、北サヴォ県、南サヴォ県などの南寄りの地区では、マーケット郡周辺の鉄鉱山地帯への移民が多かったという傾向がみてとれる。この図では、100名以上を基準として小教区を抽出したため、人口密度の低い北部のラッピ県の教区は洩れてしまったが、テルヴォラ(ラッピ県)出身の移民97名のうち84名、ア

ラトルニオ(ラッピ県)からの93名中70名がクッパー・カントリーへ移住している。加えて、出身地がスウェーデンとされているフィンランド人が155名中113名、ノルウェーを出身地とするフィンランド人が204名中192名、クッパー・カントリーへの移住者に含まれていた。これらの地区出身の移民のうちには、アルタ鉱山など、ノルウェー北部の鉱山で雇用されていた者が少なからず在ったものと推測される。

3. クッパー・カントリーのフィンランド人

1) ハンコック

ホートン、バラガ、オントナゴン、そしてキウイノーの各郡から成るクッパー・カントリーは、フィンランド人移民の多くが目的地として目指した場所のひとつであった。1861年~65年にかけて行われた合衆国の南北戦争は、最初のフィンランド人入植者をミシガン州へ呼び込む役割を果たした。戦争のために、州の銅鉱業に一時的に不況がもたらされた。若者たちが軍隊に召集され、あるいは徴兵を避けるためにカナダへ移住して、鉱山は多くの良質な労働力を失った。ポーテッジ湖北岸の丘陵で採掘を行っていたクインシー鉱業やペワビック鉱業などの鉱業会社は、その欠落を埋めるべく、ノルウェー北部の鉱山へ社員を派遣して、労働者を募集した。それに代えて合衆国へやって来た人びとの中にフィンランド人も含まれていた[11]。

1865年までに、ハンコックには50人のフィンランド人が住むようになっていた。翌年の夏には、単身の者ばかりでなく、家族を連れた者たちが、ノルウェーのフィンマルク県のいくつかのフィンランド人村落からやってきた。フィンランド人は、ハンコックからクインシー鉱業会社の経営する鉱山の近くで成長しつつあったフランクリン、ボストン、メスナードなどの小さなコミュニティへと広がっていった。クインシー鉱業会社の粉砕機が、ハンコックの東、ポーテッジ湖岸のリプリーに建設されると、間もなくそこにも多くのフィンランド人家族が住むようになった。

クッパー・カントリーで鉱業が始まった頃には、坑夫は合衆国東部諸州の銀・錫・銅鉱山から到来した。英国、アイルランド、ドイツからの坑夫もきわめて早い時期にやって来た。英国のコーンウォールから来た坑夫たちは、すぐに鉱業関係者の中心的な位置を占めた。彼らは英語を話し、熟練した技術を持つ経験豊かな坑夫であったからである。だが、フィンランド人も短い期間のうちたちまち多数を占めるようになった。クッパー・カントリーにおけるフィンランド人移民の総数は、1870年代には500人ほどだったが、80年代には約2,700人となったという。当初、北欧から北米への移住者のうちにはミネソタ

州を目指した者が多かったが、銅・カントリーへの移民はすぐに増加し、ノルウェーやスウェーデン北部出身のフィンランド人のお定まりの目的地となった。

1873年の夏、銅・カントリーのフィンランド人の人口はさらに大きく増加した。移民の多くは、出国の動きが広がっていたノルウェー北部のフィンマルク県やフィンランド西部のオウル（北ボフヤンマー県）周辺から来たが、早々にこれら新来の者は失望することになった。銅・カントリー南東部のイシュブミング周辺で稼行していた鉄鉱山のうちのいくつかがその秋に閉山となり、失業した大勢の人びとが、仕事を求めて銅・カントリーへ流入したのである。求職者の増加により、鉱業会社はより低賃金の労働者を雇用することが可能となった。こうして、賃金は貧弱に、雇用は不安定になったため、さらに西への移動を志向したフィンランド人も少なくなかった。たとえば、1879年6月7日、ハンコックを発ったダルース（ミネソタ州）行きのボートにはさまざまな国籍の多くの乗客が乗っていたが、その半数はフィンランド人だったという。

それでも地域に残ったフィンランド人は、さまざまな国籍の住民の中でも目立って活動的であった。1876年、彼らは「Amerikan Suomalainen Lehiti(アメリカのフィンランド新聞)」を刊行した。もともと、この新聞は支持

が得られなかったことと社主の能力不足のために年内に廃刊となった。その後続く週刊の新聞、マティ・フレッドによって発行された「Swen Tuuva」とその継続版「Sankarin Maine(英雄の評判)」は、地元購読者が得られたために、より長く1878年～81年まで続いた。

フレッドの新聞に掲載された広告の中に、当初はフィンランド人による企業のものではなかった。ハンコックのフィンランド人へ向けたフィンランド人企業の最初の広告は以下のようなものであった。

「みなさんにお知らせします。私は、船便のシーズンが始まったらすぐにたくさんの最高の乳牛をハンコックとカルメットへもたらしめます。

1879年3月29日

ミネソタ州フランクリン ピーター・ラーティ

町に住む人びとに牛を売るという広告の内容から、初期の銅・カントリーにおける生活状況がどのようなものであったかが知られる。晩秋に船便のシーズンが閉じると、鉄道でランスまで運ばれ、そこから一団の馬によって銅・カントリーまで運ばれるものを除けば、春になってボートが着くまで新鮮な食糧の供給は途絶え、その間、各世帯はできるだけ自給する必要がある

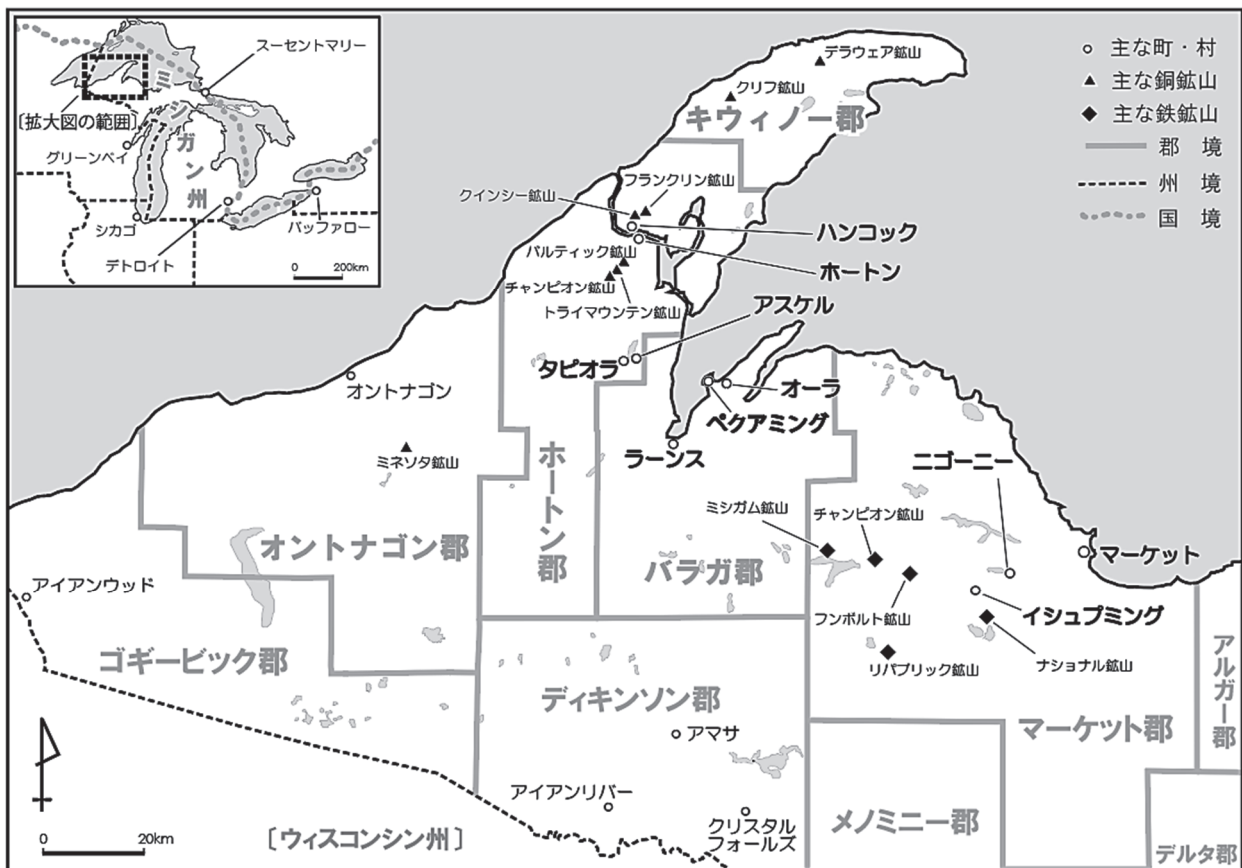


図2 ミシガン州アッパー半島西部の主な鉱山とフィンランド人居集落

注：本文において言及した集落を太字で示した

った。牛を一頭飼うことは、家族が自給自足する助けになった。ハンコックの街路は、それぞれの間に狭い小路が、街路に面した家屋の区画の背後を分けるように配置されていた。それぞれの居住者は、小路に接する裏庭に、まき小屋が付随する牛小屋を所有していた。その小路を通過して、牛は共有の牧草地へ連れて行かれるようになっていた。1960年代の時点でウエスト・ハンコックにはその裏庭に牛小屋を備えた家が何軒もあったが、そこではもう長いこと牛は飼育されていなかった。

マティ・フレッドの新聞には、彼自身が所有した書店の広告も載せられていた。そのほかには、ピーター・クリストファーがテスクコ・ストリートにフィンランド・レストランを開店するまで、ハンコックにはフィンランド人の経営する事業所はなかった。クリストファーのレストランは、テスクコ・ストリートの麓のポーテッジ湖岸でミネラル・レンジ鉄道の駅があった場所、という優れた立地環境にあった。そこからカルメットまで、一日に3往復の鉄道便があった。

域外と接続できる鉄道の便は、約35マイル離れたランスまで行かねば利用できなかった。汽船アイバンホーは、冬季を除いて、ハンコックの船渠から毎朝6時30分にポーテッジ湖を横切ってホートン側へ渡り、7時にそこからランスへ向かって出航した。ランスからの汽車は、翌朝5時30分にシカゴに到着した。シカゴは、鉄道輸送が航空便に取って代わられるまで、カップー・カントリーから域外の世界へ出る玄関口のひとつであった。

人口の増加に伴って、フィンランド人による独自の文化的活動も始まった。宗教においては、ルーテル教会の分派であるレスタディウス派と青年スオミ会議の双方が教会を建てた。禁酒協会は立派な会館を所有するようになった。さらに、スオミ大学（現フィンランドシア大学）が開学した。

フィンランド人による事業所もさらに増加した。フィンランド出身の著名な事業家としては、時計職人・金細工師であったエドワード・ワーラがいた。彼は1855年、アルクツラ（ラッピ県イイトルネオ）で生まれ、1881年にカルメットへ来て、父から学んだ取引に携わるようになった。1885年、彼は事業をハンコックへ移した。その事業は、息子のチャールズ・ワーラに引き継がれ、1950年まで続いた。ヘンリー・サカリは、アーバサクサ丘陵の対岸に位置するマタレンキ（スウェーデン、ノールボッテン州エベルトーネオ）という教会の村で生まれ、1887年にカップー・カントリーにたどり着いた。彼の畜殺場事業は、20世紀初めに拡大し、食料雑貨店を含む多くの部門をもつ大手企業となった。カップー・カントリーにおける後のフィンランド人事業者の多くは、サカリの仕事を通じて最初の事業経験を積んだ。フランク・エイロラは、1864年にメリヤルヴィ（北ポフヤンマー県）

で生まれた。後に、多くの活動を通じて、新世界に精通するようになり、1906年に、フランク・エイロラ商会を興した。食品や衣服を扱う一方で、この会社は木材や木炭を販売しており、カップー・カントリーの製錬所の多くへの木炭の供給を行った。エイロラの重要なビジネス・パートナーに、1885年にキッティラ（ラッピ県）で生まれたジョン・オルソンと、1887年にスウェーデンのエベルトーネオで生まれたネルス・エリクソンの2人があった。ウィリアム・ジョンソンは、1883年にハンコックで生まれ、ヴァルパライソ大学で学んだ後、父、アンドルー・ジョンソンの材木商を継いだ。1860年、マタレンキ出身のイサク・レートと、1864年、ブルキラ（北ポフヤンマー県）出身のジョン・ラトヴァは、共同で雑貨店を開店し、1890年まで続けた。ヒエタニエミ（スウェーデン、ノールボッテン州）に1883年に生まれたオスカー・ノルドストロームは、サミット・ストリートで何年も食料雑貨店を営んだ。1882年にヴェテリ（中部ポフヤンマー県）で生まれたネスター・レピストと、同じ年にオウル州ピハヤルヴィ（北ポフヤンマー県）で生まれたエフライム・ロヘラは、1911年に一緒に食料雑貨店を開いた。1881年、ヌルモ（南ポフヤンマー県）出身のマッティ・マッコソンは、1910年頃に清涼飲料の工場を始めた。この事業は、多くの禁酒運動に熱心なフィンランド人の心を捉えた。1889年、ムホス（北ポフヤンマー県）に生まれたチャールズ・A.クッコネンは、1903年にハンコックへ着き、ただちにスオミ大学に登録した。そこで英語を学び、写真の技術を身につけた後、彼は1912年に自身の事業を興した。

フィンランドの仕立屋は、独特のセンスをハンコックへもたらした。若い時にサンクトペテルブルクのフィンランド人居留地にあった有名な仕立屋の集団に属していた者が多かったが、イリスタロ（南ポフヤンマー県）出身のセオドア・ラウレルは、ヘルシンキで仕立ての技術を習得した。ピエリヤルヴィ（北カルヤラ県）出身のマッティ・ホンカネンは、フィンランド政府からの奨学金を受けてドイツで修行して、専門的な知識を学んだ。

ヤラスヤルヴィ（南ポフヤンマー県）の聖職者の息子で、元船員、薬理学の学生であったオズワルド・H・ベックマンが、1884年、フィンランド系アメリカ人で最初の内科医になると、地方のフィンランド人たちは医学と薬理学の双方に関心をもつようになった。

1917年の春、フィンランド人による病院がハンコックに開業された。この新しい病院のリーフレットには、「地域のカトリックの施設はプロテスタントの要求に答えていなかったからである。」と記されていた。この病院でマネージャーとして勤めた、ザカリス・ワーナー・ニカンデルは、1891年、州都のランシングで薬理学の試験に合格しており、ハンコックで最も早くから知られて

いたフィンランド人薬剤師であった。25床のベッドを有したこの病院は、ハンコック東部のポーテッジ湖を見下ろす丘の斜面に立地していた。そこからは、対岸のホートン市街の美しい景色を見渡すことができた。ここでは3人のフィンランド人医師が、他の9人とともに、手術と診療にあたった。ホルム医師は毎月2回、イシュプミングから診療に訪れていたが、1923年にハンコックへ移り、施設を借りて彼自身の名を病院に冠した。外科医としてのホルム医師の名声に惹かれ、遠くはカナダからも患者が訪れたが、16室の建物、25床のベッドは十分ではなかった。診察料は経費に見合わない低廉なもので、それすらも滞りがちであった。病院は閉院し、ホルムは1931年に合衆国西部へ転出した。

19世紀の半ばには、病気や事故に遭遇したフィンランド人へ保障を提供する保険組合が100以上あった。1880年代末、彼らはこうした保険組合の組織化に取りかかった。Suomalainen Sairastus ja Loukkaus-Apuyhdistys（フィンランド疾病事故共済組合）は1892年に設立された。当初、その対象範囲はホートン郡に限られていたが、後にキウィノー郡、バラガ郡、オントナゴン郡へも拡大された。「この組合の目的は、われわれの基金をもって、疾病や事故のために働くことができなくなった者を扶助し、支援することである。また、死亡の際には、適切な埋葬を行う。」と組合の規約に示されている。1907年には、320名の組合員があった。これをピークにその数は減少し、1913年には300名ほどになった。カップー・カントリーにおけるストライキや他の状況により、この頃、デトロイトや他の地域へのフィンランド人の集団的な移動が起こったためであった。1930年のそれでも200名の会員数があったが、1960年までにほんの数名となった。会費は月に50セントだった。「kipuraha(疾病金)」と出納簿に記された医療補助は一日あたり1ドルであった。20世紀初め、埋葬の助成金は75ドルであったが、後に150ドルへ増額された。メンバーの配偶者のための埋葬助成は25ドルであった。支払われる金額は、会社の財政状態によって異なっていた。何世代にもわたって、組合は平均して年間2,000ドルを組合員へ支払った。

2) ホートン

ホートン郡の郡庁所在地は、ハンコックの対岸に位置するポーテッジ湖南岸のホートンである。1876年、有料の橋が建設され、ホートンとハンコックおよびポーテッジ湖北岸のキウィノー半島が結ばれた。1895年、その有料の橋に替わって設置された旋回橋は、さらに、1959年には世界最大の二層式昇開橋へと付け替えられた。わずかに数分でその2本の支持塔の間を湖面の150フィート上方まで上昇させると、2万トンもの積載量の巨大な湖上貨物船でさえ、その下を航行することができた。

ホートンは、多くの人々にとってカップー・カントリーへの玄関口であったが、そこに住むことを選んだフィンランド人はかなり少数であった[12]。そこにはフィンランド人の教会組織ができたことはなく、禁酒協会も労働組合も設立されなかったが、パン屋、靴屋、散髪屋など、フィンランド人の商店は何軒かあった。ホートンのフィンランド人は、ハンコックの諸教会に所属し、近隣の都市における他のフィンランド人の活動に参加した。とはいえ、ミシガン工科大学の所在地であるがゆえに、ミシガン州のフィンランド人の歴史にとっては、ホートンもまた重要であった。この大学は1886年にミシガン鉱業学校として活動を始め、次第に拡大して、ミシガン鉱業・技術専門学校として知られた、多方面にわたる技術系教育施設となり、1964年には大学の地位を獲得し、ミシガン工科大学となった。1960年代、その入学者数は3,000名に達した。フィンランド人は、最も多い年にはその1割以上を占めた。たとえば、1950年、600名の学位取得者のうち、60名は明らかにフィンランド人の名であった。教授の中にも、通常、相当な人数のフィンランド系の者が含まれていた。

ミシガン工科大学の学生会館には、「フィンランドの部屋」と呼ばれた一室があり、しばしばフィンランド人やその他の会議や委員会に用いられていた。その部屋の壁にはフィンランドの芸術作品が掛けられていた。それらは、バート・ハイデマン教授、タウノ・テルヴォ領事、ラジオのニュース担当者であったレイノ・スオヤネンの努力、そしてフィンランド人の寄付者からの贈り物によるものであった。

4. マーケット郡の鉄鉱業とフィンランド人

アッパー半島東部のマーケット郡は、陸地面積、人口の双方においてミシガン州最大の郡であり、多くのフィンランド人住民が居住していた[13]。アッパー半島には、フィンランド人が最初の開拓者となった場所が多かったが、カップー・カントリーと同様に、鉱山開発を契機として人口の増加をみたこの地区では必ずしもそうではなかった。彼ら以前に、ニューイングランド諸州からのアメリカ人、ドイツ人、フランス系カナダ人、スウェーデン人、そしてアイルランド人がすでに来住しており、ティール湖周辺の豊かな鉄鉱山の開発にあたっていたからである。マーケットはこの地区で最も古い都市であった。1846年頃に開かれたニゴニーは二番目に古く、1856年に創設されたイシュプミングは三番目に古い都市であった。

ジャクソン鉱業会社は、この地区で創業した最初の鉄鉱業会社であった。続いてマーケット鉄鉱会社が1848年に、少し遅れてクリーブランド鉄鉱会社が参入した。フ

オーサイス、チャンピオン、フンボルト、ミシガムでも新たに豊かな鉱床が見つかった。新しい鉄道会社が組織され、鉄鉱をマーケットへ輸送するべく、新しい鉱山への路線が建設された。マーケットは、アッパー半島で最も大規模な輸出港となり、そこから鉱石を積んだ船が次々と出航して、成長の途上にあったアメリカの製鉄業の大きな需要に応える原料を運んだ。アッパー半島を縦断してデルタ郡のエスカナーバへ至る鉄道も建設された。そこも、重要な鉄鉱輸出の中心地となった。

銅は地下深くまで掘り進めて採掘されたのに対して、鉄鉱石は露天掘りで採取された。坑夫は、削岩機や大槌を用いて10~12フィート(約3m~3.7m)の穴を掘った。穴は岩石を粉砕するべく黒色火薬で満たされた。穴を穿つ賃金として1フィートあたり35~60セントが、岩石の質に応じて、支払われた。鉱石は、ラバや馬が曳く貨車に載せられ、鉄道まで運ばれた。傾斜地では貨車は重力を利用して降り、そのスピードはブレーキを操作する者によって制御された。ラバや馬は、空になった車を曳いて坂を登った。

イシュプミングはこの地区で最も大きな鉱業コミュニティだった。1880年代以前から付近で稼行していた鉄鉱山には、クリーブランド、ニューヨーク、スペリオール、マーケット、レイク・アンジェリン、パーナム、フォスター、ソールズベリ、そしてナショナルなどがあった。

鉄鉱業の町は、カップー・カントリーと比べても、成熟度の低い粗野なコミュニティだった。男たちの大多数は「flop houses (簡易宿泊所・安宿)」と呼ばれた下宿屋に住み、酒場だけが集いの場だった。

おそらく1880年代頃に設立された、最初のフィンランド人の事業所はパール・ストリート沿いの数軒のフィンランド風酒場であった。20世紀初頭までに、他にも商社、家具店、葬儀屋、宝石店、菓子店、少し遅れて、J・コスキ商会、A・ケトゥネンと息子の仕立屋、エルソンの瓶詰工場、ルーシ・ヴィヴァン石油会社などといったフィンランド人の事業所が立地した。市や町の役所に勤めていたフィンランド人は記述し切れないほど多くいた。

イシュプミングから約3マイル、ナショナル鉱山の周辺にウイントロップという小さなコミュニティが発達した。1890年代の終わり頃、フィンランド人の家族がここに来るようになった。イシュプミングの3マイル西の小さなコミュニティ、ノース・レイクはモッズ鉱山の周辺に成長した。多くのフィンランド人が、男性限定の下宿屋に住んで、そこで移民としての生活を始めた。

1907年4月に姓名不詳の著者によって編集された統計書によれば、当時、イシュプミングには2,958名のフィンランド人がいた。うち、1,804名は男性、1,154名が女性であった。男性の908名は坑夫、62名は職工、45名は実業家、30名は農夫、49名は臨時雇い人、7名はサラリーマン、そして18名は酒場の所有者、または手伝いであった。156世

帯が家を所有し、42世帯が農場を所有していた。278世帯は市民権証明書を持っていた。

ニゴーニーはマーケットとイシュプミングの間、後者に近接して立地していた。ニゴーニーの端の方に、イーグル・ミルと呼ばれた製材所があり、多くのフィンランド人が雇用されていた。ニゴーニーから数マイル離れた小さな鉱山町、パーマーの歴史は1865年にまで遡る。その住民の90%はフィンランド人であった。コミュニティの公務員、教員、消防士、警察官、そして実業家はほとんどフィンランド人であった。ウィリアム・ルエッキは長いこと郵便局長を務めた。ルーテル派教会は、彼らにとってもっとも重要な関心事だった。

ニゴーニー付近には、ウーシ・スオミ (Uusi Suomi : New Finland) という小さな農業コミュニティもあった。数十年にわたって、ウーシ・スオミの人びとは、ニゴーニーの文化活動に貢献した。

マーケットは鉄鉱石輸送のための重要港となったが、1868年6月11日、マーケット=ホートン=オントナゴン会社鉄道の構内から起こった火災は、事業所の建物や船渠ともども、町の大部分を焼き尽くした。再建は迅速に進み、わずか2年後の1870年までに、856,000トンの鉱石がマーケットから移出された。これは当時の最大量であった。船による移出量は、年を追って増加し、1910年までに500万トンに達するようになった。

マーケットが発展して、「スペリオール湖沿岸の都市の女王」と呼ばれるまでになったことには、2つの要因が寄与していた。ひとつめは、1881年にマーケット・アンド・マキナク鉄道が完成したことであった。この鉄道によって、アッパー半島全域からデトロイトへの迅速な輸送が開かれた。もうひとつは、北部ミシガン大学の前身である師範学校が、1899年に設立されたことであった。

マーケットは多くのフィンランド人を惹きつけた。それは、そこが雇用を生み出す港と鉄道の中心地だったからであるが、そこに教員養成教育機関があった事実も重要であった。教育職は、長いことアッパーミシガンのフィンランド人の専門職、とくに女性の職業として好まれ、多くの者がマーケットで教育を修めた。大学の教授陣の中にも多くのフィンランド人がいた。

イシュプミングの西には、フンボルト、チャンピオン、そしてミシガムといった、フィンランド人のコミュニティがある町があった。それらはすべてマーケット郡の産鉄地域の一部であった。チャンピオンの歴史は1863年まで、フンボルトは1864年まで、ミシガムは1872年にまで遡る。チャンピオンでは、チャンピオン製鉄会社が1867年から採鉱を始め、ホテル、下宿屋、酒場、教会が立地して地区の中心となった。フンボルトは、ワシントン製鉄会社の鉱山の周辺に発達した。町と同じ名前の美しい湖の西端に位置するミシガムでは、1872年にジェイ

コブ・ホートンによって鉄の採取が始められた。その頃までに町はかなり立派にできあがっていたが、翌年起こった火災のために焼失した。

フィンランド人がこれらの鉄鉱山へやって来たのは、1870年代のことだった。彼らによってチャンピオンに教会と禁酒会館が建てられた。ミシガム湖の湖岸には、夏季の週末の保養のために、ニゴニー、イシュプミング、マーケットのフィンランド人がよく訪れた。

1869年の春、チャンピオンの南方約10マイルのミシガム川の川岸に豊かな鉄鉱床が発見された。これがきっかけとなって、1870年にリパブリック製鉄会社が組織されたことが、リパブリックの町の始まりとなった。この町は当初、アイアン・シティの名で知られた。その鉱山は、2年後に鉱石を産出し始めた。ミシガム川の河水が掘鉱所に用いられた。元来のリパブリック鉱山に加えて、ウェスト・リパブリック鉱山も近所に開かれた。

この鉱山の事業が開始された頃、リパブリックの住民の多くはフランス人であったが、まもなく、アイルランド人とスウェーデン人が加わった。最初の住民の中には、多少のフィンランド人もいた。1880年代の初期になると、数百名単位でフィンランド人がやって来た。1895年から1913年の間に、多くのフィンランド人が町の周辺で農場を始めた。

5. 鉱山を離れたフィンランド人

1) フィンランド人の農場開墾

1890年の夏、フィンランド人がバルマニンサーリ(バルマンの島)と呼んでいる、ダラー・ベイの東、トーチ湖とポーテッジ湖に挟まれたポイントミルズにおいて、チャッセルの先の森のどこかに豊富な魚に恵まれ、肥沃な土地に囲まれた美しい内陸湖があるという噂が広まっていた。ある日曜の朝、プオランカ(カイスヌー県)出身の2人の若者が、ボートで出かけ、ポーテッジ湖を横切ってスタージョン川へ向かった。一日中流れに逆らって櫂を漕ぎ、流木を避けるために岸に沿ってボートを曳いた後、彼らはキャンプファイアの側で一夜を明かした。翌朝、彼らは川の流れを追って進み、湖を見つけた。その湖がオッター湖であった。その規模と美しさは、2人の冒険者の予想を上回るものであった。ポイントミルズへ戻った彼らの報告を聞いた5組の家族の代表はホートン郡の庁舎へ赴いて湖周辺の自作農場を申請した [14]。

シンプルだが頑丈な、それぞれの家族のための丸太小屋が、協同作業によって湖の近くに建てられた。最初のサウナの建設は、これらの先駆者に特有のある種の活力や熱意のようなものの例証である。丸太を切断し、形を整える作業は、夜明けの薄明かりの中で始まった。日没までにサウナは使用する準備が整った。冬が来る前に、

それぞれの家族のためのサウナも協同で作られた。このような協同作業は、長年にわたって、干し草の刈り入れや穀物の収穫、バレイショの収穫でもみられたオッター湖の特徴であった。男性が家やサウナ、そして納屋を建てている間、女性は小鎌で草を切り、それらを牛に与えるためにポールラックに架けて乾燥させた。湖が凍る時期、多くの人びとはホーステイルグラス(スギナ)を伐採し、そりで小屋へ運んだ。荒野には多くの鹿がおり、湖ではたいした苦勞なくして魚が得られた。入植者は時折チョウザメを捕らえ、キャビアの饗宴を開いた。湖の名前の語源であるカワウソ(otter)もたくさんいた。それらの毛皮からベッドカバー、帽子、ミトンが作られた。雪が降る前に、耕作地の開墾作業が始まった。

彼らの自作農場は、オッター湖の北東岸、現在のアルンハイムのすぐ西にあった。低湿地を貫いて延びていた、アルンハイムへ通じる道には、一步分の距離ごとに丸太が置かれていた。これが、そのコミュニティに付けられた“step”を意味する、アスケル(Askel)というフィンランド語由来の地名の語源とされている。

これらの開拓者の幸福な経験に関する話は、すぐにカップー・カントリーの坑夫たちの耳に届いた。次の夏、5組のフィンランド人の家族がやってきて、対岸の地に自作農場の土地を開墾し始めた。彼らとともにやって来たドイツ人は長年、この地区で唯一の非フィンランド人だった。新しい集落はタピオラと名付けられた。誰がその名前を提案したのかについては多少の論争があるが、それが誰であれ、古代フィンランドの神話に登場する森の精霊タピオを知っている者であったことは間違いない。

そこでは、10年の間、子供たちの教育は家庭で行われていた。1901年の夏、公的な集會がもたれた。この地区に英語を話せる者が誰もいなかったため、校区の教育長のグリフィスが通訳として立ち会った。その場で、次の秋にタピオラの湖岸にあるジェレミアス・ピーターソンの丸太小屋を校舎として学校を開くという決定がなされた。最初の教師とその後継者はカルメットから来たフィンランド人だった。彼らは余暇の時間に入植者たちの日々の雑用を行ったり、彼らとともに漁労や狩猟を行ったりした。こうして、常にオッター湖沿岸地区の特徴であった、家庭と学校の緊密な協力関係が始まった。言うまでもなく、学校が始まった当初、フィンランド語以外は話すことも理解することもできない子どもたちにとって、学校での勉学は困難なものだった。

最初の数年間、それぞれの集落自身の校舎ができるまでは、学校はタピオラとアスケルで交互に開かれた。アスケルでは、1907年に、上階に教員の住宅を備えた2階建ての校舎が建てられるまで、アンティ・ヘイキネンの家の上で学校が開かれた。アスケルで教鞭をとった人びとのほとんどは、地元の娘を含むフィンランド人女性であ

った。地元の者を教員として雇用することは、フィンランド人コミュニティではよくみられることだった。生徒のうちに、教師と同じ年齢の若者や、どうかすると年上の者がみられることも珍しいことではなかった。

1913年～14年にカップパー・カントリーで生じたストライキは、フィンランド人のオッター湖地域への移住を誘発した。坑夫たちは次から次へと鉱山町を去り、自作農場になり得るところならどこへでも移動した。1940年のピーク時には、アスケルに35戸、タピオラには200戸の世帯があった。1960年代の時点でも、人口は比較的多かった。そこは肥沃な耕地に恵まれており、より生産性の低い土地へ移動するよりも、父の後を継いで家に留まることを選ぶ若い世代が家庭内に多かったためである。

2) フィンランド人と製材業

キウィノー湾の最奥部に位置するラーンスには、バラガ郡の郡庁舎が置かれている。その歴史は、フランス人伝道師ルネ・メスナードがこの地区のインディアンへの伝導を試みた1660年まで遡る。1830年代から1840年代に、ジョン・クラークとジョン・H・ピテゼルの主導の下、メソジストの教団が確立された。ラーンス創設の正確な年は1871年、マーケット・ホートン・オントナゴン鉄道会社の列車が初めてそこまで到達した年であった[15]。

比較的早い時期にラーンスへ移住したフィンランド人の多くは、スミス製材会社の製材所に雇用された者であった。この製材所は、町の半分を焼き尽くした1896年の火災で全焼した。材木を伐り出す伐採キャンプには、ほぼ必ずフィンランド人がいた。ラーンス共同墓地の一角には、移民が埋葬された無縁墓地があった。すべての移民は、その国籍がどこであれ、ポーハンクス（「辺境地から来た洗練されていない移民」の意）と呼ばれた。

早くから知られたラーンスのフィンランド人は、1855年、テルヴォラ（ラップ県）で生まれ、鉄道建設現場で働いたヘンリー・パヤリ、1897年、セイナヨキ（南ポフヤンマー郡）に生まれたセオドア・ジョン・ジョンソン、そして、ヘンリー・コティラであった。1923年から25年の間には、非常に多くのフィンランド人がラーンスに到着した。この時期は、製材産業の最盛期であった。また、1958年には、セロテックス工場も操業を開始した。ラーンスへ移住したフィンランド人の多くは、チャンピオン（マーケット郡）のような鉱業集落や、ペクアミング、オーラ、ワトン、バラガ、アルンハイム、ペルキーなどのバラガ郡内のフィンランド人コミュニティから移住して来た者であった。ペクアミングやオーラなどは、それ自体、材木伐採跡地を開墾してできた集落であった。

1870年代、キウィノー・ベイとヒューロンベイの間の、ラーンスから北東へ延びた半島は、長きにわたってチペワ・インディアンの所有地だった。そこは、低湿地によ

って周囲から隔絶されており、彼らに避難所、安全な風除け港、そして豊富な魚に恵まれた水域を提供していた。1877年、ヘバード・アンド・サーバーク製材会社が、この半島をチペワ族の酋長、デイヴィッド・キングから借り受け、その翌年、そこに巨大な蒸気動力の製材機を設置した。インディアンたちは、そこにPe-qua-qua-wamingとして知られた村落を有していた。そこが後のペクアミングである。製材所は、間もなく年間2億5千万フィートの材木を生産するようになった。会社は、森の住人を含む650名の男性を雇用した。キングの死後、その相続人は半島全域をチャールズ・ヘバートと彼の会社へ売り渡した。彼はその後、オークの巨木の森を含む半島のすべての法的権限を手に入れた。その土地と製材所は、後にデトロイトの自動車製造業者、ヘンリー・フォードの所有となった。そこには、トラヴァース湾レッドストーン会社が操業した採石場もあった。フィンランド人は、伐採キャンプや製材所で働くべく、1880年代の早い時期にこの地区へ来た。1886年までに、彼らは、会社の刻印がある材料を使って建てられた自前の小さな教会を所有した。彼らは禁酒協会も持っていた。コミュニティには、約20戸のフィンランド人の家族があった。フォードが製材所を閉鎖すると、フィンランド人たちはここを去った。新しい土地所有者は、寂れた教会をあるカトリック宣教団へ寄付した。その宣教団は、それをラーンスの近くのゼバ・インディアン居留地へ移し、聖カタリナ宣教教会と名付けた。

1914年、カップパー・カントリーのストライキが収束に向かう中、半島中央部の伐採跡地の販売が開始された。失業中のフィンランド人坑夫たちの多くは、家族を伴ってそこへ移住し、切り株に覆われたこれらの区域を開墾した。最初の入植者は、1914年6月20日に到着し、ヘバート・サーバークの3番キャンプ跡地を購入した。そこには、まだ居住可能な状態の建物があった。7月には、2世帯が来て、最初は5番キャンプ跡地の調理棟に住んだ。その夏の終わりにはさらに3世帯の家族が到着した。これら1914年に到着した者たちは、ストライキの苦闘と不安を経験した末に訪れた田舎暮らしの平和を喜んだ。彼らは、その新しい郷里をオーラ(aura:鋤)と名付けた。誰かがその所有地で、明らかに樵夫がそこに残っていた古い鋤を見つけたためであった。粘土質の土壌では、バレイショ、オート麦、オオムギがよく実った。そして、オーラは、小さな集落だったが、繁栄する農業コミュニティとなった。

ペクアミングの製材所が閉鎖された後にも、さらにフィンランド人が到来した。禁酒協会、生活協同組合の店、教会、そして公会堂は、コミュニティの活動の中心となった。1964年7月の末頃、50周年記念行事が挙行された。プログラムの呼び物は、かつての住人、エルシー・レー

ト・コリンズによる「坑夫の夢の実現」という題目の演劇だった。そこには、銅鉱山の坑夫の厳しい生活とオーラでの平和で牧歌的な生活への移動が描かれていた。

6. むすびにかえて

本稿では、19世紀後半から20世紀初頭にかけてミシガン州北部の鉱業地域に流入したフィンランド人移民が、どのように地域に定着し、居住域を拡大していったかについて、A. ホルミオの“History of the Finns in Michigan”に記述された事例に基づいて検討した。

鉱山開発を契機として、一定規模の鉱山集落が形成された場合、鉱山自体が稼行を停止した後も、それらは一定の範囲の中心集落として存続した例がしばしばみられたことは、日本国内の事例でも報告されている。アッパー半島においても、銅鉱山が盛んに開発された時期には、ノルウェー国内の鉱山などで労働経験があったと思われるフィンランド国内の北寄りの地区、ノルウェーやスウェーデンからの移住者が多かったが、やがて商店や事業所の経営や教育機関での就業を通じて地元で定着するフィンランド人移民が現れるようになり、ホートン、ハンコック、カルメットなどの都市的集落の存続に寄与した。とはいえ、すべての都市的集落で同じような展開がみられたわけではなく、たとえば、ホートンとハンコックの事例についてみれば、前者には後者ほどのフィンランド系住民の定着はみられなかった。ハンコックには、スオミ大学を前身とするフィンランド大学が立地しており、そこでフィンランド文化の伝承やこの地域に移住したフィンランド人の足跡を記録する努力が持続的に行われてきたことも影響していたことと思われる。

鉱山の衰退期には、20世紀初めまでさまざまな産業や生活で大きな需要があった材木の伐採の労働力として、域内の各地に転出する者が少なくなかった。また、より安定的な生活を求めた者は伐採跡地や他の耕作適地を開墾して農場の経営者となった。こうして、フィンランド人移民は、故郷の北欧にも似た広大な森林に覆われていたアッパー半島の各地に居住域を拡大していったのであった。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、移民としてアメリカ合衆国に流入したのはフィンランド人に限ったことではなかった。19世紀末に欧米諸国を襲った恐慌や第一次世界大戦などの戦乱の影響もあり、ヨーロッパの各地から合衆国を目指す人々が続出した。アメリカ合衆国の産業や多文化社会が発展した時代のただ中であって、フィンランドの人々がひととき強い結びつきを保ち、自らのルーツに関する記録を次世代へ伝承する活動に携わってきたことは特筆すべきことであつたといえる。このことを可能とした背景のひとつとして、自らのアイデンティティを堅持し続けようとする意識が当時のフィンランド人移民の間に共有され

ていたことがあげられる。こうした意識の形成には、600年に及ぶスウェーデンによる支配やロシア帝国、ソビエト連邦の長きにわたる脅威や圧力に耐えてきた人々の歴史が作用していたものと推測される。ホルミオ自身、聖職者であったこともあり、各地の教会組織の展開について特別な関心をもって著述しているのに加え、「カレヴァの騎士」や「カレヴァの淑女」といったフィンランド人の親睦組織や禁酒運動、生活協同組合活動や文化活動が緊密に行われてきたことに関する言及にも多くのページが割かれている。こうした組織的活動も、アイデンティティの堅持に大きく関わっていたものと推測される。

川崎茂は、鉱山集落を、未開またはネイティブな空間への文明社会の進出過程に形成されるフロンティア集落として捉え直すことの意義について述べている [16]。ミシガン州アッパー半島の鉱業集落にももちろんそうした側面があったが、鉱山の稼働中にあっても衰退後にあっても、フィンランド人たちは積極的にフロンティアを開拓していったのであった。もっとも、1960年代には、より高い収入の得られる都市部を目指して移住する若年層が見られるようになっていたことをホルミオも指摘しており、この書に取り上げられた集落が、現在までの間に失われてしまっている例も少なくない。それでもなお、アッパー半島における居住域の拡大に果たしたフィンランド人の営みは際立ったものであったといえる。

本稿で取り上げたのは、ホルミオが辿ったフィンランド人の足跡のうち、鉱山業に関わりの深いごく一部の事例に過ぎない。アッパー半島の他の地域、あるいは、フィンランド人たちの教会組織や文化活動の展開についても検討する機会を持ちたいと考えている。

注

- [1] 齋藤(1980).
- [2] 原田(2020).
- [3] 同書は、1967年にフィンランド語で出版されたが、ここでは2001年にエレン・M・リーナネンによって出版された英語版を参照した。
- [4] Lynch(2002)は、グスタフ2世アドルフの時代にスウェーデンが北欧の強国となった背景に、領内の鉄、銅の増産と輸出があったと主張している。16世紀、南米での銀の増産のあおりで銀価格が暴落したことにより、スペイン王室が銅貨を通貨とすることを決定したために銅の需要が高まっていたが、ドイツ中部では銅山の開発が深部に到っており、ハンガリーではハプスブルク家の支配に対する抵抗運動が高まるなど、それぞれの事情でヨーロッパの古い銅山地域での産銅が減少していた。

そのような中、スウェーデン中部オレブロ郡のコッパベルリ銅山などの銅山にドイツ人鉱業技師の技術が導入されたことと相まって、スウェーデンはヨーロッパの銅鉱業の一大中心地となっていたという。

- [5] ニュースウェーデン植民地は、勅許会社のニュー・スウェーデン会社によって、1638年にデラウェア川流域に建設された。1655年にオランダ人によって占領され、最終的には英国の植民地に吸収された。
- [6] 前掲 [3] , pp. 34-35.
- [7] Kolehmainen J. I. 1946. “Suomalaisten siirtolaisuus Norjasta Amerikkaan”, Fitchburg: Raivisaja Printing Press.
- [8] 前掲 [3] , pp. 41-43.
- [9] 前掲 [3] , pp. 441-450.
- [10] ホルミオは、フィンランド系住民の多くが所属したアメリカ合衆国内のルーテル教会の聖職者の中には、フィンランドに関する知識に疎く、不正確な情報しか得られない可能性を指摘しつつも、鉱業地域7郡においては、長きにわたって、フィンランドの教会から派遣された聖職者が担当した例が多かった点で、他の郡よりも高い信頼性が期待できること、スオミ大学（現フィンランドシア大学）の所蔵するフィンランド系アメリカ人歴史アーカイブが活用できたことをあげて、比較的信頼性の高い結果が得られたと主張している。
- [11] 前掲 [3] , pp. 76-86.
- [12] 前掲 [3] , pp. 96-97.
- [13] 前掲 [3] , pp. 133-143.
- [14] 前掲 [3] , pp. 97-101.
- [15] 前掲 [3] , pp. 103-106.
- [16] 川崎 (1992) .

主要参考文献

青木恭子 2014. 帝政ロシア国内移住にみる移動の論理—移住者の出身地と移住先の分析から、富山大学人文学部紀要, 60, pp. 1-26.

石野裕子 2017. 『物語フィンランドの歴史—北欧先進国「バルト海の乙女」の800年』, 中央公論新社.

川崎茂 1992. 『鉱山業フロンティアの諸相—環太平洋地域論—』, 大明堂.

齋藤実則 1980. 『鉱山と鉱山集落』, 大明堂.

塚田秀雄 1983. オラウス マグヌスの「北欧民族史」にみる農業と農民, 人文学論集 (大阪府立大学) , 1, pp. 53-66.

原田洋一郎 2020. 19世紀後期の五大湖沿岸地域における地域形成に関する一考察, 東京都立産業技術高等専門学校研究紀要, 14, pp. 29-39.

Holmio A. K. E. 1967. “History of the Finns in Michigan”, Translated by Ellen M. Rynnanen 2001. Detroit: Wayne State University Press.

Lynch Martin 2002. “Mining in World History”, London: Reaktion Books Ltd.